

「生命尊重を育む観察飼育と飼育動物のありかたに関する調査研究」(課題番号11680202)  
平成11年度～12年度科研費研究(基盤研究C)  
中川美穂子 第1章、5 学校飼育動物の維持管理法から(平成13年1月)

### 家畜飼育

人の生活にかかわる飼育を理解させるために学校で家畜を飼育することである。学校で多く飼育しているニワトリやウサギも家畜ではあるが、学校では採卵や毛皮を取ることを第一の目的としていないのでこれらは家畜というよりペットになっている。その他ヤギやヒツジなどの家畜は、ウサギやハムスターとは違い対象が大きいだけに存在感がある。もし、小学校で大きな家畜を児童と共に愛情をかけて飼育し、ま近でその生活や感情を味わえたら、大きな感動を得られるだろう。しかし、問題はこの種の家畜は世話に多くの労力と時間が必要で世話をし続けることは大変だということである。

ある市の小学校でこの何年間か、ヤギを飼育している。メスを飼育し、子を産ませて、児童にヤギの乳を飲ませたり子育ての様子などを見せている。また、子ヤギのうちメスを残し、翌年は母子ともに種付けをすると聞きいている。また、どこかの村の小学校で、ヤギ(あるいは牛)をお産のときに、近くの大学の畜産科に預けて、いよいよ産まれるとの連絡でバスをたてて出かけ、村中の児童と保護者がお産に立ち会いとても感動した、との話しもある。

つまり、これらの飼育は、どちらも近くの大学の獣医・畜産関係学科の全面的な援助により、種付け、妊娠診断、妊娠中の検診、お産、産まれたオスの子ヤギの処分、病気の対応など、すべて成り立っているのである。

また、このような動物の寿命は長く、ヤギで17年から20年であるので学校で飼育するのは困難な種類といえる。伝統的に長く続く学校全体の大きな情熱がなければ、このように排泄量も多く、敷きわらの世話や餌の管理に時間と手間が必要な動物を支えられないだろう。普通、教師は児童そのものに多くの時間と情熱をささげており、このような動物を長く責任を持って飼育するのは不可能に近い。また、動物を良く理解している専門家が近くにいて、動物の気持ちや役割などを児童に語り飼育を支えなければ、児童は動物から殆んど良い影響を得られず動物は悲惨な事になる。その専門家にしても、個人の獣医師では情熱だけでは対応しきれない。つまり、感動的な家畜飼育の例として紹介されているものは、幸いにも近くに全面的に支援してくれる農家や大学の獣医学部があるからで、このような大学などの支援が望めない多くの小学校にとっては、良好な飼育は難しいだろう。

また、家畜のもう一つの面を忘れてはならない。以前、ブタを可愛がって飼育していた学年が、卒業後に引き継いで飼育してくれる下級生をどうしても確保できなくて、皆で良く検討した結果屠殺場へ送ったとの事例があった。報道では、みなで悩み検討した体験がすばらしいと賞賛されているが、これには難しい面があると思う。普通、いくら納得したからと言って、心底から可愛がって飼っていた動物を肉にしてしまうと言う事に、人は耐えられるだろうか？

肉生産農家は、最初から「肉にするため」という目的を覚悟しながら飼育しているが、彼らはなるべく動物を可愛がらないようにして、名前もつけずに(つまりペットとしての気持ちを作らないように)飼育しているようだ。特に、ブタは可愛がれば、とても愛らしくなってしまう、肉として送り出すときがづらいのだ。小学校での飼育例に付いては、これも経験といえればそれまでだが、児童はけなげだから説得されれば納得するだろう。しかし、彼らの感情の奥底でくすぶり続けるものが無かったらだろうか。われわれ開業獣医師も安楽死をしなければならぬ時、その動物の目をなるべく見ないようにして世話をする。つまり動物と気持ちを通わすのがづらいのである。

厚生労働省の施設で、迷い犬や不用の動物を収容して5日目に殺処分場に送り出す所が各県にある。そこでは、飼い主不明でも病気の場合は、職員の獣医師などが心を砕いて治療する。しかし、飼い主が現れずに日数が経つと処分場に送り出すことになる。端的に言えば、動物好きの人が動物を殺すために治療し、世話をするのである。この矛盾が長く続くため、ここで働いている獣医師を含めた人達の心の管理には大変なものがあり、「人と動物の絆・国際会議」(第1章4、1参照)でもこの人達の心のケアが取り上げられている。大人ですら解っていても、ノイローゼになる例があることを十分に考慮すれば、最後に殺すことが予想される動物の飼育には慎重に考えるべきであろう。何しろ児童はこころから可愛がってしまうので、その挙句、「人の為に殺す」ではショックが心配される。児童の心を引き裂くに等しい。知人にも、児童のころ可愛がっていたニワトリを家人が肉にしてしまっ以来、肉を一切口に出来ない人がいる。また別の例では、鳥の羽がふわふわしている夢をみると汗をかいてとてもいやな気分になる人が、中年になってふるさとの年寄りから、小さいころあるニワトリを可愛がっていたが、それを家人がつぶして羽をむしっていたのを幼い自分が見ていたと教えてもらい、それがあの羽がふわふわする夢であったと気がついた話などがある。いわゆるトラウマという話である。実は、我が家でも

ニワトリの卵を売り、雄ニワトリをご馳走としたことがあるが、子供たちや従業員への事前教育に気を配り、時間をかけた。それでも直接世話をしていた中学生の末っ子は、当日ニワトリ肉を口にしないように外出してしまった事がある。最初に、「オスをつぶす」計画をしっかりと彼女に伝えられなかった結果と反省している。

もし、殺すことが予想される家畜を飼うのならば、最初にそのように児童に説明して、殺す動物として日々の世話をさせる必要がある。決して愛玩にはしてはならない。トカゲを動物性蛋白質の栄養としているアマゾンの原住民が、たまたま小さなトカゲを児童にペットとして与えて育てさせたら、それは決して食べないと雑誌で見た事がある。

学校では、児童に対する家畜飼育の影響の良い面を強調した結果、不用意にヤギやブタなどの飼育に乗りだすことにならないように気をつけたい。家畜を苦勞して飼わなくてもペット飼育がしっかり根付いていれば、時折の農家、大学、動物園などの協力で効果のある家畜体験ができるだろう。しかし、この基礎飼育がないまま家畜体験をしても得られる効果は少ないだろう。ある県の中学校で、乳牛を生徒に見せる校外授業を行ったところ、大人たちの期待に反して生徒たちは口々に「汚い！臭い！」と言って、牛に近づこうともしなかったそうだ。教師も獣医師も大いに落胆したが、これも事前に彼らが動物を知り、共感を培っていたら違ったものになったに違いない。ペット飼育体験のある児童なら、その汚い畜舎に生活をさせられている牛たちの気持ちを推察し、それでもなおそうしなければならない人の存在まで考えは及んだと思うが、今回は、乳牛が単に汚いところで牛乳を産出する物体としか見えなかったのではないかと思うと残念である。